伊予市 じんけん教育
一人ひとりの人権が尊重される、明るい伊予市をめざして
2019 No. 29
■編集・発行 伊予市教育委員会
愛媛県人権教育協議会伊予市支部
〒799-3113 伊予市米湊820番地
TEL.089-982-5155 FAX.089-982-5156

今回は、昨年十一月二十日に伊予市で開催された中予地区人権・同和教育研究協議会における授業公開の様子を紹介します。

伊予幼稚園の公開保育

人権・同和教育の目標

遊びや多様な生活経験を通し豊かな感性を育てるとともに、望ましい人間関係をつくることのできる幼児を育てる。

一　主題名

笑顔かがやく保育を目指して

二　ねらい

三歳児

友達や教師と一緒に遊んだり関わったりすることを楽しむ。

四歳児

自分の思いを表現しながら友達と関わり遊びを楽しむ。

五歳児

友達と同じ目的をもって思いを伝え合いながら遊びを進める。

三　保育の様子

幼児が好きな遊びを選び、友達と楽しめるよう、また、昨日からの遊びが継続してできるよう保育環境を整えました。

どんぐりや木の実などでご馳走作りをしたり、といを園庭に組み立ててどんぐり転がしをしたりして友達と楽しみました。「どん・じゃんけん」の遊びでは、三歳児もルールを教えてもらいながら異年齢で楽しみました。じゃんけんで負けると「負けたよ」と大きな声で次の友達に知らせ、「じゃんけんで負けても面白いんよ」と笑顔で遊ぶ姿が見られました。また、室内では友達と相談しながら大型積み木で基地作りを楽しみました。

どん・じゃんけん

片付け後、各クラスで絵本や歌を楽しみ、遊びの中で感じたことや、やりたいことなどの思いを発表しました。今日の活動の振り返りをしながら、明日への活動に期待感をもち、降園しました。

降園前のひととき

四　研究協議より

○　園全体で、人権・同和教育の視点から保育環境を整え、友達や異年齢児との関わりから思いやりのある幼児を育てようとする取組が見られた。

○　異年齢で遊ぶ幼児を多面的に捉えるには、職員間で遊びの姿や友達とのトラブルなどを日々伝え合い、様々な面から幼児の成長を把握することの大切さを学んだ。

○　片付けの時、三歳児が使った遊具をそのままにしていたら、五歳児が片付けを行い、途中で三歳児が片付けに来ると、そっと見守る五歳児に感心した。

○　降園前に幼児がみんなの前で今日の感想や思いを発表する中、言葉で伝え、友達の話を聞く取組から、一人ひとりの思いを認め、受け止めることの大切さを学んだ。

○　乳幼児期は人間形成の基礎が培われる大切な時期である。子ども自身が周囲の人から大切な存在として受けとめられ、愛されることによって自分以外の人の存在に目を向け、信頼感をもって親しむようになる。人権を尊重する子どもを育てる取組として、自分の思いを伸び伸びと表現できる場づくり、心のつながりのある仲間づくりが大切である。豊かな感性を育む保育内容の工夫が必要だ。幼児期の発達に応じた適切な環境の中で集団生活を経験することは、基本的人権尊重の精神の芽生えにつながる。

研究協議の様子

伊予小学校の公開授業

人権・同和教育の目標
人権意識を高め、共に伸びる伊予っ子の育成

第三学年　道徳科

一　主題名
心と心を通わせて
教材名「橋」(きょうだい)

二　ねらい
偏った見方や考え方を乗り越え、相手を正しく理解していこうとする心情を育てる。

三　授業の様子
この教材「橋」という物語は、互いに偏見をもった隣同士の二つの村の対立を描いています。
「じろさく」という西の村の子どもが、二つの村の境界線である川を越えて、サルに襲われている東の村の女の子を無心で助けます。女の子の兄「ごんすけ」は、初めはじろさくが妹をいじめていると思ってどなりつけますが、じろさくが妹を助けてくれたことを知って、心から謝ります。このことをきっかけに、じろさくとごんすけと妹の三人が一緒に遊ぶようになり、その様子を見ていた他の子どもたちも、一人、また一人と遊びに加わり、やがて、両方の村人が、大人も子どもも力を合わせて、橋を作ったという話です。
心と心を通わせることによって互いに偏見を取り除き、交流を深めていくという内容は、相手のことを正しく理解しようとする心情を育てるのに適したものです。

グループでの話合い

授業では、「誰とでも仲良くするために大切なことはどんなことでしょう」という学習課題について、「橋」を読んで考えようという投げかけからスタートしました。
じろさくが女の子を無心で助けた後、子どもたちは、「東の村人は乱暴だ」という言い伝えが、偏見によるものであったことに気付きました。さらにごんすけについても、初めは「西の村人は乱暴だ」という言い伝えから、じろさくが妹を泣かしたと決めつけていましたが、事情を聞いて気持ちが変わったことに、子どもたちは気付きました。
そこで授業者が、「ごんすけの気持ちが変わったのはどうしてでしょう」と問いかけました。子どもたちは、まず一人ひとりで考え、グループで意見を出し合った後、全体で発表しました。
「『西の村人は乱暴だ』という言い伝えから、じろさくがひどいことをしたと決めつけていたが、本当はサルを追い払ってくれた優しい人だと分かったから」という考えにたどり着きました。
最後に「誰とでも仲良くするために大切なこと」を考えました。
子どもたちは、「だれかが悪口を言っても、それで決めつけない」、「自分で本当のことを確かめる」、「その人のいいところを知って仲良くする」などの意見を発表しました。

四　研究協議より
○　一番大切な、発言しやすい環境が普段からできていて、周りの児童が他者を認めることができていた。
○　今回の授業は、子どもの可能性を広げられる内容であった。大人が子どもに、未来のあるべき姿を伝えたい。
○　ホワイトボードで書かせた後のまとめ方がとても上手く、「決めつけてはいけない」「噂を信じてはいけない」「本当かどうかを確かめる」というねらいに迫る言葉が出ていた。押さえるべきところをきちんと押さえることができており、授業者の教材に対する理解の深さを感じた。

「誰とでも仲良くするために大切なこと」を考える

三年生の子どもたちが、偏見を乗り越えることの大切さを学んだ授業でした。

第六学年　社会科

一　単元名

世界に歩み出した日本

二　ねらい

産業の発展による生活や社会の変化により、民主主義への意識が高まり、社会的な権利を求める中で水平社が創立されたことを理解するとともに、水平社を立ち上げた人々の思いを考え、差別に立ち向かう心をもって行動することの大切さに気付く。

三　授業の様子

六年生の授業では、近代の日本で部落差別と闘うために立ち上がった人々の思いや願いを子どもたちに考えさせることを目指しました。

全国水平社創立大会での山田少年の演説を取り上げ、山田少年の思いや聴衆の思いを考えることが、子どもたち自身の差別解消への意欲につながると考えました。

児童に山田少年の演説を提示し、そこにある思いを一人ひとりに書かせました。それをグループで話し合い、キーワードとなる「思い」とその説明をボードにまとめました。

「思い」をまとめる際に、今までの人権学習の積み重ねである「人権ファイル」をめくりながら、江戸時代前からの部落差別に関わる学習内容を振り返ることで、より具体的に山田少年の思いや願いについて考え、まとめました。

授業風景

全体での各班の発表は、次の通りです。

○「立ち上がれ！みんなのために」

・みんな同じ人間だ。

○「差別される理由なんてない」

・勇気をもって強い思いで立ち向かっている。

○「差別なく、いい世の中へ」

・差別される苦しみで限界を感じていたから。

○「水平」

・今までの学習で「平等」よりも「水平」のほうがより強く平等を表しているから。

○「いい未来へ」

・涙の日々もあったと思うから。

○「本当の平等へ」

・未来の子どもたちのためにめざします。

○「希望」

・自分が希望の光になりたい。

これらをさらに深め、山田少年が、「本当の平等を実現し、いい未来に、いい世の中にしよう。そのために、仲間を増やし、みんなで団結しよう」という強い思いをもっていたとまとめました。

人権ファイルを振り返りながらボードにまとめる

そして、『全国水平社創立大会宣言』につなぎ、私たちの愛媛県、伊予市にも、差別をなくすために立ち上がった人たちがいることに気付かせました。

さらに、今もなお差別をなくすために闘っている方のお話から「正しいことを知り、自分のものにしてほしい。そして、自分たちの手で差別を解消するんだという気持ちをもってほしい」というメッセージを伝えて、締めくくりました。

四　研究協議より

○　授業者の情熱的な思いが子どもたちによく伝わって児童がよく考えており、すばらしい姿だった。

○　人権ファイルの蓄積がよかった。キーワードを見付けるという学習活動を社会科でも道徳科でもしていて、子どもたちがよく身に付けていた。

○　キーワードをきっかけとして自分の思いを表現することで、言葉を大切にしていることが感じられた。

授業者の熱い思いが子どもたちに強く伝わり、それを受けて子どもたちがしっかりと考えた授業でした。

伊予中学校の公開授業

人権・同和教育の目標

差別の現実に深く学び、同和問題をはじめとする様々な人権問題について正しく認識し、明るい展望をもち、その問題の解決に取り組む生徒の育成

第三学年　道徳科

一　主題名

差別に克(か)つ

資料名　「小春日和」（「ほのお」愛媛県同和教育協議会編）

二　ねらい

○　部落差別の現実を知るとともに差別に屈しない生き方を学ぶことで、差別を許さない強い信念をもって差別を解消しようとする態度を育てる。

○　差別解消への明るい展望をもって、自分たちが生きる社会をよりよいものにするために主体的に行動する実践力を身に付けさせる。

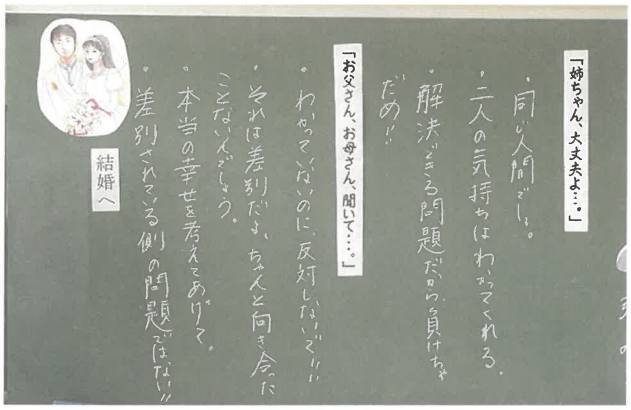
三　授業の様子

本資料は、被差別部落に生まれた「崇司」が恋人の「裕美」と結ばれ、小春日和のような穏やかで、幸せな生活を営むようになるまでの軌跡が描かれています。しかし、そこに至るまでには、周囲の偏見や差別との闘いの日々でもありました。その苦難の道のりの中で、差別と向き合う「崇司」はもちろん、「裕美」やその妹の姿は、胸を打つ資料となっています。特に、結婚に強く反対する「裕美」の両親に対して、「裕美」や妹が真正面に向き合っていく姿に感情移入することができ、差別を憎む心情に迫ることができます。

そこで、指導にあたっては、「裕美」の強力な味方となった中学生の妹に思いを寄り添わせながら、現実的な問題として差別を克服するために自分自身ができることを考えさせました。

まず、伊予市の平成二十九年度市民意識調査の差別に関する質問についての回答結果を見ました。そこで、「結婚相手を考えるときに気になることはどんなことですか」との質問に、『被差別地域出身者かどうか』との項目に十一％の人が「気になる」と答えていることに触れ、生徒に自分事の問題であると感じさせました。

そして、「みんなが康代（妹）の立場なら、お姉ちゃんやお父さん・お母さんにどんな言葉をかけますか」と質問し、個人で考えた後、グループで話し合わせました。お姉ちゃんには、「解決できる問題だから負けちゃだめ」「同じ人間でしょ。二人の気持ちはわかってくれる」など、お父さん・お母さんには、「二人がやっているのは差別だ」「真剣に同和問題に向き合っていないでしょ」などの意見が出ました。



板書の一部

生徒の感想には、「私たちは、もう立派な当事者だと思います。これから社会に出ても、この問題を忘れてはいけないし、社会に出ることでこの問題により直接的に関わったとき、正しい知識をもって、この問題に向き合わないといけないと思いました」「どうすれば解消できるのかを考えるようになりました。私たちは、同和問題に関係ないのではなく、この社会に生きる人々みんなが同じ意志で解決しなければならないと思います」などとあり、この授業を通して、生徒は、差別に憤りを感じ、自ら進んで同和問題を解決しようとの思いを強くすることができたと考えられます。

授業風景

四　研究協議より

○　学習会へ参加したときのデータを使用したと聞いたが、学習会で学んだことが他にもあれば教えてほしい。

①　市民意識調査の中で、「同和問題を知らない」と回答した若者が多かったという

結果を受けて、これまで心に残る授業ができていなかったことに気付かされた。

②　人権教育講座の講師であった米田先生の「指導の際には、とにかく熱く！」という言葉に感銘を受け、それが今回の授業に際しての励みとなった。

○　今日の課題に対して、先生の考える答えはどうだったのかを教えてほしい。

①　大人になっても意識をもち続けるということを忘れないでほしいという思いで課題を設定した。

②　「正しいことを知るということが大切なんだ」ということも大事にした。

○　生徒の反応の中で、「かわいそう」でなく、「間違いは間違いなんだ」と言えることがすごいと思った。

○　自分の差別心を解放している生徒に育っているなあと思った。

○　本日は、妹の立場で考えることがテーマで、若い力でも差別解消ができる授業ができていた。

○　一つ欠かせないところがあったとすれば、妹も姉が反対されたことに対して「辛かった」という気持ちを押さえると良かったと思う。

○　妹の気持ちを考えることで、部落差別が、周囲の人たちも巻き込んでいたことが分かったのではないかと思う。

研究協議の様子

この度の研究協議会を通じて学んだしたことを、本校の人権・同和教育の更なる充実に生かしていきます。

伊予農業高等学校の公開授業

人権・同和教育の目標

第一学年の目標

身近な人権問題を考えることにより、人権意識と仲間意識を育てる。

第二学年の目標

人権獲得の歴史を通して、差別解消への力強い歩みを理解させる。

第三学年の目標

様々な差別を解消する実践力を養う。

第三学年　ホームルーム活動

一　主題名

結婚差別の解消に向けて

二　ねらい

○　結婚差別の実態を知り、差別を自らの問題として捉え、差別は絶対に許さないという意志や信念をもたせる。

○　困難なことに直面したときには、周りの人と協力し、乗り越えていくことが大切だということを理解させる。

三　授業の様子

①　アンケート結果発表

○　結婚差別があることを知っていますか？

・　知っている　二十名

・　知らない　十八名

○　どのような差別があるか知っていますか？

・　出身地・家柄・職業など

②　朗読劇

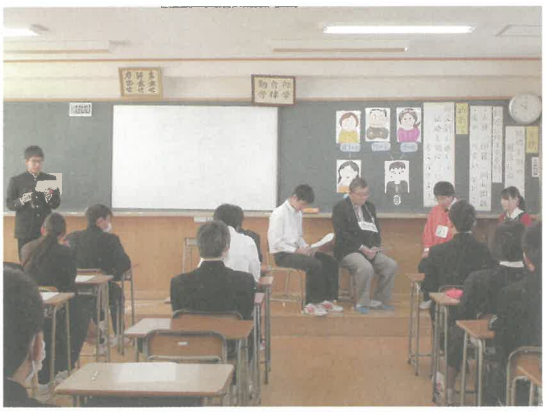
〈登場人物及び配役〉

結婚しようとしている「博」（生徒）と「道子」（担任）

道子の母親（生徒）

博の父親（副担任）

博の母親（生徒）



朗読劇風景

〈あらすじ（一部抜粋）〉

道子の母親

「もしかして結婚を考えているの。でもね、たぶん博さんの家はわたしたちの家のことが気に入らないと思うの」

道子
「私が被差別部落出身だから反対されているのね」
…
博の母親
「博、わかっているの。あの子は被差別部落出身の子よ」
博
「それがどうした」
博の父親
「絶対に結婚には反対や」
博
「たとえそうだとしても、そういう理由で結婚を反対するのはおかしいよ。二人で幸せな人生を歩みたいんだ」
博の父親
「周りの人から軽蔑の目で見られる日が続くぞ。生まれた子どもも学校でいじめにあうかもしれないんだぞ」
博
「そういう差別を全部はね返すだけの強い気持ちで生きていきたいんだ」
博の母親
「博が好きになって、二人が幸せになるんだったら、いいかもしれませんね」
博の父親
「現実をわかっていない」
博
「周りから反対されても道子と結婚する。道子となら差別に打ち勝っていく。家族を全力で守ってみせる。道子といるときが幸せなんだ」

朗読劇　終

【担任の発問】
○　なぜここまで父親は反対したのか、まず個人で考えてみましょう。
○　次に六～七人のグループで考えて、各ホワイトボードに書きましょう。

【生徒の意見】
・いわれのない差別なのに世間体を考えている。
・息子の将来が心配なのではないか。
・これでは差別はなくならないではないか。

【担任の発問】
○　このあと、博と道子はどうすべきでしょうか。

【生徒の意見】
・父親を説得する。
・父親の意見は無視する。
・結婚したいという言葉だけでなく、行動でも示す。
・差別と闘う覚悟で結婚するということを伝える。

③　まとめ

【担任の発問】
○　結婚差別は非常に重く、深い問題です。どうしたら、結婚差別がなくなるか、考えましょう。

【生徒の意見】
・時間がかかると思うが、このような勉強を続けていくことだと思う。
・法律をさらに整備する必要があると思う。

まとめ風景

【授業者のまとめ】
○　一人ひとりが差別に負けない強い気持ちをもち、生きていくことが大切です。
○　困難なことに直面したときに、周りの人（親戚、友達など）と協力して乗り越えることが大切です。
○　周りの人の助けが大切です。私も結婚することになったら、差別に負けない強い気持ちで結婚を考えていきます。

四　研究協議より

【授業者自評】
○　この朗読劇を通じて、生徒に身に付けさせたかったことが二つあります。一つ目は差別を許さない信念をもたせること、二つ目は困難なことに直面したときには、周囲の人と協力して乗り越えていくことです。

【出席者からの意見】
○　朗読劇が非常に分かりやすかった。自分の心の中にある差別が一番ネックになる。まず、自分の心の中に差別があることを知ることが必要だ。
○　生徒の発言の中で「時代が流れたら解消するのでは」という意見があったが、差別の解消についてもっと議論を深めていってもよかったと思う。ただし、まとめのところで担任の先生がきちんと指導されていた。
○　温かい雰囲気の授業で、構造的な板書は、小中学校の道徳の授業に近く、高校生にも分かりやすいと思う。
○　中学校では「峠」という教材で結婚差別を扱っている。小中高校の連携や発達段階に応じた学習が改めて必要だと感じる。